

8. AP-PCR-SSCP 法による肝細胞癌の遺伝子異常の検討

湯本 泰弘 花房 直志(岡山大・RI 総合セ)
羽田 元 小出 典男 真治 紀之
東 俊宏 辻 孝夫 (同・一内)
三村 哲重 (岡山済生会病院・外)

手術および剖検により得た小肝細胞癌 (small HCC) 10 例と進行肝細胞癌 (adv HCC) 10 例を対象とした。

1. AP-PCR-SSCP 法により DNA 欠失を疑った領域から計 11 個の LOH を検出した。また癌部特異的塩基欠損と置換を見いだした。

小肝癌 (<3 cm) 10 例中 2 例において、primer 18 を用いた AP-PCR-SSCP 法により検出した DNA 断片を、AP-PCR-SSCP 法による DNA 解析を行うと共に、癌特異的異常バンドの解析を行った。Gene Bridge 4 Radiation Hybrid panel を用いてこのクーロンの染色体における局在部位を決定した。Primer 18 を用いた AP-PCR-SSCP 法によるバンドの変化と、癌特異的遺伝子増幅を検出した。AP-PCR-SSCP の電気泳動ゲルをみると small HCC の 1 症例では正常部位で 2 本のバンド (A, B) がみられるが、癌部ではこれらのバンドが欠損し、新たなバンド (C) が観察された。同様に adv HCC 症例 Ta においてもバンド B の欠損と新たなバンド C の出現が観察された。この AP-PCR-SSCP 産物の塩基配列は新たな癌抑制遺伝子の一部である可能性を示唆している。

今回、この DNA 断片を 93 個の Gene Bridge 4 Radiation Hybrid panel によって解析して、chr 9q21 部位に新たな STS マーカーとして同定した。

2. RLGS 法によって、肝臓癌と胆嚢肝より抽出した DNA を RLGS 法によって解析し、肝臓癌で多数の陽性 spot を検出し、新しい塩基配列を検出した。これらを用いて、 γ 線放出核種標識癌遺伝子による遺伝子診断に関する検討を行いたい。

9. リンパ管シンチグラフィが術後リンパ瘻の診断に有用であった 1 例

三船 啓文 小林 満 高尾 敦子
安藤 由智 佐藤 修平 新屋 晴孝
竹田 芳弘 平木 祥夫 (岡山大・放)

症例は 48 歳男性。左骨盤腔の軟骨肉腫の手術後、ドレーンよりリンパ液様の滲出液の流出が続いた。CT, MRI では術後膿瘍が考えられたが、滲出液の性状からリンパ漏が疑われたため、リンパ管シンチグラフィが施行された。術創部に pooling がみられたため術後リンパ漏と診断された。創部の再手術にて肉眼的にリンパ漏が確認され、リンパ管の結紮術が施行された。その後ドレーンからの漏出液は消失した。以上、リンパ管シンチグラフィが術後リンパ瘻の診断に有用であり、治療に寄与した 1 例を報告した。

10. 正常ボランティアでの ^{133}Xe dynamic SPECT の検討

高橋 一枝 佐々木真弓 西山 佳宏
影山 淳一 佐藤 功 大川 元臣
田邊 正忠 (香川医大・放)
三谷 昌弘 (住友別子病院・放)

正常ボランティア 10 名 (喫煙者は男性 4 名、非喫煙者は男性 4 名、女性 2 名)、年齢 21~23 歳 (平均 22 歳) に対して ^{133}Xe dynamic SPECT を行った。呼吸機能 ($\text{FEV}_{1.0\%}$, %VC) の平均値はそれぞれ喫煙者 92.6, 90.6, 非喫煙者 100.5, 93.9. ^{133}Xe ガス (370 MBq) は bolus 吸入し、吸入時 planar および平衡時 SPECT を撮像した後、洗い出し相の SPECT を 1 分毎 6 分まで撮像した。使用装置は Prism 2000. SPECT の上、中、下肺野の任意時間内の $T_{1/2}$, MTT が各スライスに占める割合を求め検討した。喫煙者では非喫煙者に比べ、 $T_{1/2}$, MTT の延長が認められた。全例で中葉、舌区の前胸壁よりの $T_{1/2}$, MTT は延長する傾向がみられた。喫煙者、非喫煙者での差があり、喫煙による呼吸機能への影響が示唆された。